探檢實記　地中の秘密

蠻勇の力

江見水蔭

青空文庫

――氷川社内の一小破片――それが抑もの初採集――
――日本先住民は大疑問――余は勞働に耐え得る健康を有す――

誰でも知つて居なければならぬ事を、然う誰でも知らずに居る大問題がある。自分も知らぬ者の一人で有つた、それは日本に於ける石器時代住民に就てゞある。

明治三十五年の夏であつた。我が品川の住居から遠くもあらぬ桐ケ谷の村、其所に在る氷川神社の境内に、瀧と名に呼ぶも如何であるが、一日の暑を避けるに適して居る靜地に、清水の人造瀧が懸つて居るので、家族と共に能く遊びに行つて居たが、其時に、今は故人の谷活東子が、畑の中から土器の破片を一箇拾ひ出して、余に示した。

まさか余は、摺鉢の破片かとも問はなかつた。が、それは埴輪の破片だらうと言うて問うて見た。

活東子は鼻を蠢めかして『いや、之は、埴輪よりずツと古い時代の遺物です。石器時代の土器の破片です』と説明した。『すると、あの石の斧や石の鏃や、あれ等と同時代の製作ですか』と聞いて見ると。『然うです、三千年前のコロボツクル人種の遺物です。此土器の他に、未だ種々の品が有るのですが、土偶なんか別して珍品です』と答へた。

『それでは、野見宿禰が獻言して造り出した埴輪土偶とは別に、既に三千年前の太古に於て、土偶が作られて有つたのですね』

『然うです、それ等は皆コロボツクルの手に成つたのです』

余は、コロボツクルの名は、曾て耳に入れて居た。同時に人類學者として坪井博士の居られる事も知つて居た。けれども、日本に於ける石器時代に就ては、全く注意を拂はずに居たのであつた。

のみならず、いくら注意を拂つても、却々我々の手に――其遺物の一破片でも――觸れる事は難かしからうと考へて居たのが、斯う、容易に發見せられて見ると、大いに趣味を感ぜずんばあらずである。

『這んな處にでも君、遺物が有るですか』

『有りますとも、第一、品川の近くでは有名な權現臺といふ處が有ります。其所なんぞは大變です、這んな破片は山の様に積んで有ります』

『君が斯う如何もコロボツクル通とは知らなかつたです。何時の間に研究したのですか』

『それは友人に水谷幻花といふのが有ります。此人に連れられて、東京近郊は能く表面採集に歩きました』

話を聞いて見ると、如何にも面白さうなので、つい〳〵魔道に引入れられて了つた。抑も此氷川の境内で拾つた一破片（今でも保存してあるが）これが地中の秘密を探り始めた最初の鍵で、余が石器時代の研究を思ひ立つた動機とはなつたのだ。

其後、帝室博物館に行つて陳列品を一見し、それから水谷氏と交際を結ぶ様になり、氏の採集品を一見し、個人の力を以て帝室博物館以上の採集を成し得る事を知り。坪井博士や八木氏等の著

書、東京人類學會雜誌及び考古界等を讀み、又、水谷、谷、栗島諸氏と各所の遺跡を發掘するに至つて、益々趣味を感じて來た。いくらか分つて見ると、いよ〳〵進んで發掘を續ける樣に成つた。

今まで注意せずに何度も〳〵歩いて居た其路から、三千年前の遺物を幾個となく發見するので、何んだか金剛石がゴロ〳〵足下に轉がつて居る樣な氣持までして、嬉しくて溜らなかつた。但しその時代には、精々〳〵打製石斧か、石鏃屑位で、格別驚くべき珍品は手に入らぬのであつた。

併しながら、白狀する。此時代には、研究は第四か第五位で、第三は好奇心であつた。第二は弄古的慾心？であつた。第一は實に運動の目的であつた。

鍬を擔いで遺跡さぐりに歩き、貝塚を泥だらけに成つて掘り、其掘出したる土器の破片を背負ひ、然うして家に歸つて井戸端で洗ふ。此一日の運動は、骨の髓まで疲勞する樣に感じるのであるが、扨て其洗ひ上げたる破片を食卓の一隅に並べて、然うして、一杯やる時の心持といふものは、何んとも云はれぬ愉快である。それから三千年前の往古を考へながら、寢に就くと、不平、煩悶、何等の小感情は浮ぶなく、我も太古の民なるなからんやと疑はれる程に、安らけき夢に入るのである。斯くして翌朝起出でた時には、腦の爽快なる事、拭へる鏡の如く、磨ける玉の如く、腦漿が透明であるかの樣に感じるので、極めて愉快に其日の業務が執れるのである。

余は正しく生れ替つた心地である。發掘を始め（其他の方面に於て角力を取つた）てからは、身體の健康は非常に良好で、普通の土方としても一人前の業務が取れる樣に成つて見ると、益々多く大きく遺跡を掘り得る樣になり、從つて遺物も多く出す樣に成つた。

雪が降つても掘り、雨が降つても掘り、どんな事が有つても暇さへあれば掘り進む。其方法も亦進歩を生じて、從來の遣り方とは大いに異なつた掘り方をするに至つたのである。

此蠻勇の力、それが積り積つて見ると、運動の爲とか、好奇の慾とか、それぱかりで承知が出來なくなつて、初めて研究といふ事に重きを置く樣になり、進んでは自分で學説を立てるとまで——先づ今日では成つたのである。

以上は餘りに正直過ぎた白狀かも知れぬ。けれども、正直過ぎた自白の間には、多少の諷刺も籠つて居るつもりだ。

と云ふものは、碌々貝塚を發掘して見もせずに、直ちに地中の秘密を知つた振をして、僅少なる遺物を材料に、堂々たる大議論を並べ、然うして自個の學説を立てるのに急な人が無いでも無い。

かゝる淺薄なる研究を以て、日本先住民の大疑問に關し、解決が容易に與へ得らるべきか、如何か。

先住民は、アイヌか、非アイヌか。コロボツクルか、非コロボツクルか。現在に於て、アイヌ説を代表される小金井博士、非アイヌ説を代表される坪井博士、此二大學説は實に尊重すべきであるが、これ意外に出て論じる程の材料を、抑も何人が集めつゝあるか、思うて茲に至ると、實に寒心に耐えぬのである。

大學の人類學教室、帝室博物館、此所には貴重なる標本が少からず集められ、又集められつゝあるが、併しながら、單に石器時代の遺物にのみ、大學なり博物館なりが、全力を盡されるといふ事は、不可能で、又其目的のみの大學でもなし博物館でもない、故に今一息といふ岡目の評が其所に突入するだけの餘地が無いでも無い。

然らば他に、専門に、これを研究的に集める人が有るか。

有るといふだらう。我、それであると名乗る人もあるだらう。併しながら、いたづらに完全の物のみを選び、金錢の力を以て買入れ、或は他の手を借りて集めて、いたづらに其數の多きを誇る者の如きは、余は決して取らぬのである。之等は單に弄古的採集家なるのみ、珍世界の主人たるのみ。

自ら資を投じ、自ら鍬を取り、自ら其破片をツギ合せて、然る上に研究を自らもし、他が來つて研究する材料にも供するにあらざれば——駄目だ。

偶然の結果ではあるが、余は此責任を負うて立つべく出來上つたと信じる。余が筆の先にて耕し得たる收入は極めて僅少にして、自ら食ひ、自ら衣るに未だ足らざれども、足らざる内にもそれを貯へて、以て子孫に傳へるといふ、其子は未だ無いのである。恐らく此後も無からうと思ふ。今の處では養子を仕やうとも考へて居らぬ。されば若し生活に餘りある時には、それを悉く注いで遺跡の發掘を成し得るのである。

更に又余は時間を有し、浪人生活の氣樂さは、何時でも構はず發掘に從事するとが出來るのである。

更に又、更に又、余は勞動に耐え得る健康を有す。

此三拍子揃つたる余は、益々斯學の爲に努力して、誰でも知らなければならぬ事の、誰でも然う委しく知れずに居る一大問題を、誰にでも知れる樣になる爲に、研究を進めて行かねばならぬ。

蠻勇の力を以て、地中の秘密を發き、學術上の疑問に解決を與へねば、已まぬのである。

青空文庫情報

底本：「探検實記　地中の秘密」博文館
1909（明治42）年5月25日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。
※「採集」に対するルビの「さいしう」と「さいしふ」の混在は、底本通りです。
入力：岡山勝美
校正：岡村和彦
2019年7月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

探検實記　地中の秘密

蠻勇の力

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　江見水蔭
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/